殺人鬼とペーパーナイフ

婀凛栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺人鬼とペーパーナイフ

【Ｎコード】
Ｎ７９５０Ｃ

【作者名】
婀凛栖

【あらすじ】
僕には、物心つくよりも前からの付き合いの可愛らしい幼馴染みがいました。そして、彼女には他人には決して言えない、友人にも言えない、親にも言えない、本人すらも言えない絶対の『秘密』がありました。それを知るのはただ一人、僕だけで、その彼女の『秘密』とは、そしてそれに振り回される僕の日常は……

The prologue

「聞いたよ。また人を殺したんだって？」
「……え？」
そいつ、九条（くじょう）　朋夜（ともや）は、いつものように図々しく人の家に上がり、いきなりそう言って、いつものように部屋の少ない備品の一つであるソファに腰を降ろした。
「まったく、これで今週に入って何人目だい？快楽殺人者の同族嫌悪なんてどうせ僕には関係ないけど、同じ町でこう何度も続くと、あまり気持ちの良いことじゃないんだけど……」
私はテーブルに、朋夜のと私の分との、今さっき淹れたばかりのインスタントコーヒーの湯気の立つマグカップを置きながら、私は、いつものように朋夜の話に耳を傾けた。
「それに、最近は連続して女の人なんて、最近の女の子はそんなに怖いものなのかい？」
そして、朋夜は、そんなわけないか、と自分で何か勝手に出した結論に納得しながらコーヒーを啜る。
「でも、まぁ、本当にこの町は物騒だよね。いや、この町だけでも言えることでもないか」
「そうですね、最近は外に出てないですからそういう連中は野放しでしょうし……」
「……ちょっと待って、今なんと……？」
……あぁ、言うのが遅かっただろうか、いや、まぁ、狙ったけど。
「ですから、最近は外に出てない、と」
「……本当に？」
「えぇ、最近は学校のテスト期間だったので、朋夜、たしか貴方もそうでしょ？」
朋夜は、その質問にはけっきょく答えなかったが、とりあえず私

が『通り魔』的な犯行を繰り返しているという誤解だけは解けたみたいだった。
「……って、ちょっと待ってよ、流香(るこ)。何で通り魔ってわかるのさ？」
そんなくだらないことを訊く彼に、
「……さぁ？感みたいなものですかね？
……まぁ、強いて言うなら、普通の『快楽殺人者』は同族同士で殺そうなんて思わないから、私が勝手にそう思った、みたいなものですよ」
私がそう言うと、彼は納得したように何度か頷いていた。
「……あれ、でも……」
そして、彼は、
「じゃあ、何で流香はその『同族』を殺すの？」
私にそんなくだらない質問をした。

「それは、私が彼らと違って『異常』だからですよ」

そして、あの日の記憶が正しければ、私はそう答えたと思う。

1，人間観察　7／2（朝）

「……暑いわね」
別に誰かに言うわけでもなく、ただなんとなくという理由とは言えそうにない理由で、授業中にも関わらずそいつは呟いた。
「まぁ、もう七月に入ったしね」
そして、長年の付き合いという理由で、僕はそれに答えた。　基本的に、授業は真面目に受けなくてはならないものだが、そいつの『言葉』はそれ以上に真面目に受け答えなくてはならない、なぜなら、そうしないと、そいつが何かしらの暴走を見せるというのが目に見えていて、そして後で痛い思いをするのが自分という、何とも理不尽な結果があるとわかっているからだ。
「……本当に暑いわね」
はたして、僕の言葉を聞いているのかいないのか。
どちらにせよ、そんなものには興味の無さそうに、気怠そうな目で炎天下の校庭をガラス越しに見下ろしながら、“紫藤（しどう）　那和（なな）”は、暑い暑いと繰り返していた。
「……そんなに暑いならそのジャケットくらいは脱いだら？
夏だってのに黒いジャケットなんて、見てるこっちが暑くなるよ」
「……そうね」
そう言って、彼女は視線をこちらに向け、机に寝そべりながら、真っ黒なジャケットを器用に脱いで、イスの背もたれにジャケットを乱雑に引っ掛けた。
彼女、紫藤　那和は学校で知らぬものはいないと言えるであろう有名人であり、容姿端麗・才色兼備と言われ、精巧過ぎるアンティークドールのような人間には無いような綺麗さを持つ人物で、
「……もうむしろ全裸にでもなろうかしら……」
自他共に認める『変人』だ。

「……止めてくれないの？」
そして、質の悪いヘタレでもあり、
「本当に脱ぐわよ？」
学校でも有名な問題児である、色々と厄介な僕の幼馴染みである。
「とーもーやー…」
そして、彼女には決して人には言えない秘密があり……
「もうっ構ってくれないなら脱ぐ！」
「あ。ごめん、聞いてなかった……かも…」
その秘密のことを語る前に一つ、この時の僕は、彼女の信条が『有言実行』だったことを、僕は失念していた。
「―っ！？脱ぐ！」
「今からちゃんと聞くけど、ダメかい？」
「……じゃあ、脱がない！」
「うん、それがいい」
「じゃあ、ちゃんと私の話聞いててよね！」
……暑い暑いと繰り返して脱ぐか脱がないかとかの話を……？
「ねーちゃんと聞いてくれるー？」
「はいはい、聞くよ。那和の話をちゃんと聞く。」
先生も僕に気を使ってか、授業を進める気も無さそうに娘の自慢話なんか始めている。
これが、普段からの僕達の日常だった。
那和は教師だろうが何だろうがまったく相手にしないし、興味も抱かない。
だというのに、昔からの付き合いのせいだろうか、僕の言うことだけは人並み以上に聞き入れ、僕が相手にしないと拗ねたり怒り出す、まるで『生まれて初めて見たものを親と思い込むヒヨコ』のようなやつである。
そのため、教師や、あまつさえ、大部分の生徒達ですら極力彼女に関わろうとはせず、
学校生活などにおいての彼女の意志から行動、問題にいたる全て

を暗黙のうちに担われているようなものとなってしまっていた。
「何かねー、最近またこの町で殺人鬼が出て来たっていうのよ。
それも、十代後半から二十代前半の綺麗な女の子しか狙わないから『ジャック・ザ・リッパー』なんて呼ばれているのよ？」
そんな物騒な話を、彼女はどこか楽しそうに話していた。
「じゃあ、那和も狙われないように気をつけなきゃね」
「え？」
「だって、那和は綺麗過ぎるから。気をつけないとダメだよ」
「……え、あ。……うん、ありがとう……」
そう言って、那和は興奮で顔を紅潮させながらも、どうにか頷いてくれた。
どうやら、今回はちゃんと忠告を聞いてくれるらしい。　前みたいに
「殺人鬼を探すわよ」とか言われるかと思ったが、珍しく忠告をちゃんと聞いてくれるなんて、珍しいを通り越して初めてかもしれない。
「……明日は雨かな」
僕の呟きは、授業の終了を伝えるチャイムによって、たぶん那和には聞こえなかったと思う。
「え？今なんて言ったの？」
「ん？別に、それよりも次は体育だよ。授業に遅れる前に着替えて来なよ」
「うん、じゃあ、また後で！」　那和が教室から出ていってから僕は小さな溜め息を一つつき、ジャージに着替えることにした。
「いやいや、見る限り相も変わらず熱いけぇ、今日も朋夜と紫藤のバカップルぶりが全開じゃ」
ジャージに頭を突っ込むとファスナーがしまっており、頭が出せず、聞き慣れた声の主に色々とツッコミたかったができないと判明。
とりあえずジャージのファスナーを開けて頭を出してから、声の主に

「そんなんじゃないよ」とだけ、言った。
「それに、もし僕がそう思っていたとしても、那和はそう思わないよ」
「……いや、まぁ、……うん、グランドスラム級のにぶちんのお前さんじゃけぇ、あまり気にせんでええよ……」
このゴリラのような巨体の似非広島弁を好んで使う友人、“武蔵清人”は罰の悪そうな顔で話を無理矢理に誤魔化した。
「……？どういう……」
―意味だ、と訊こうとした時だった。
「ねぇねぇ、朋夜はブルマ派？それともスパッツ派？」
「……噂をすれば何とやら……じゃのう…」
「……清人、たぶんそれは違うと思うよ…。それから、那和、……その格好は？」
ん？とか言いながら、那和は自分の格好を見つめ直し、
「黒のレース上下セット」
大胆な下着に身を包んだ…もとい、大胆な下着姿の那和が笑顔でそんなことを言った。
「……紫藤、たぶん朋夜が言ってるのは下着の説明じゃないんじゃよ」
「……とりあえず服を着て。ブルマかスパッツかはそれから……」
気付くのが、いや気付かせるのが遅い授業始まりの鐘は響くが、僕達だけが先に授業に参加することを那和は許さないだろう、たぶん、絶対。
……まぁ、言い訳がましいが、そんなこんなで、僕にとっての日常通りの喧騒により、僕達は仲良く三人揃って体育の授業に遅刻することにしたのだった。

1，人間観察　7／2（朝）（後書き）

ども、婀羅洙です。
本作“殺人鬼とペーパーナイフ”を読んで下さってありがとうございます。
本作は、主人公と幼馴染みと友人達との痛快アクション学園コメディーを予定しております（多分）。
ついでに言いますと、この先は全てノリとかだけで押し切る気満々なのでその点はご了承下さい（笑）。
ヒロイン的な存在はまだまだ増やす気満々ですが、私自身の好みでロリっ娘は絶対に参加させます。
誰が何と言おうが、ロリっ娘だけは絶対です。

……と、いきなり明らかに話が脱線してましたね。
では、まぁ、とにかく、こんな感じの婀羅洙が描く“殺人鬼とペーパーナイフ”を今後ともよろしくお願いします。

2，人間観察　7／2（昼）

「……ん」
「あ。起きた？」
起きたか、と聞かれるということは、どうやら僕は寝ていたらしい。
視界がぼやける目を擦ると、目の前には見慣れた幼馴染みの顔が、いつものような無邪気な笑顔を向けていた。
そして、目が覚めてから、意識が覚醒を始めて、やっと感じられる、なんとなく今さらな違和感。
何だか、妙に柔らかい感触が体を包んでいるような、妙に温かい感覚。
あまりの気持ちの良さに、もう一度意識を手放して眠ってしまいそうだった。
体が先ほどから感じ続ける謎の浮遊感も眠りを誘う一要因であろうか……。
……浮遊感？
……まさか……
「……あぁ、やっと起きたん？……お姫様……」
「……お姫様……ピンポイントに今の朋夜よね♪」
「……那和、とりあえず降ろしてくれないかな？」
清人の『お姫様』で一気に、現状の把握と意識の覚醒ができた。
そして、今の状況に顔が赤くなるのを感じる。
「……よりにもよって、何で僕は那和にだかれているんだい？
それから、本当に恥かしいから降ろして……」
実は初めてではない、俗にいうお姫様抱っこ。
しかし、初めての時は、たしかかなりの昔に那和に、今は何と白昼堂々と、またもや那和に抱かれているという何とも情けない状況

だが……
「えー。やだー朋夜を離したくないー、……それとも、私に抱かれるのは嫌？」
僕は思わず、むしろ抱いてくれとか言いそうになるのを堪えた。
もし、そんなことを言えば、那和が何をするかわからない。
「……とにかく、降ろしてよ」
「いーやー」
「暑いでしょ？」
「暑くないもん」
「嘘つき」
「嘘じゃないもん」
「じゃあ、僕が暑い」
「暑いの？」
「うん、暑いや」
「じゃあ、ジャケット脱ぐね」
「……いや、それじゃ大して変わらないんじゃ……」
「……朋夜は、その、路上にも関わらず、脱ぐのがいいの？」
「……もう何でもいいからとにかく降ろしてくれると嬉しいよ……」
「……何か、大変なんじゃよ……微妙に会話がずれとるし……」
清人の溜め息は、僕達の会話に入れなかったためか、少し寂しそうだった。

「それで？どうして僕は那和に抱かれたまま商店街を連れ回されて辱められた後にファミレスまで連行されてるんだろうね？」
「さぁ？」

満面の笑顔で惚けた答えを返す那和。
そんなこんなで、またいつもの彼女の気紛れによるものだろうか、僕達は学校帰りにファミレスに寄って、……否、僕はファミレスに連れ込まれていた。
「一応とめたんじゃが、全然聞かなかったんじゃよ……」
……うん、那和は無茶苦茶なやつだから、止めようとしてくれただけでも感謝だ。
「……それから……」
そして、僕は、チョコレートパフェが二つと、コーヒーが二つと、ケーキが一つ、数枚の空の皿が置かれているテーブルを挟んで正面に座る、サングラスをかけた異常に痩せている男に、
「何で徨(こう)さんまでいるんですか？」
そう尋ねた。
その男、名前は紫藤　徨といい、那和の実の兄で、僕とも昔からの付き合いがある人物であった。
「うーん、まぁ、俺が那和に君を連れて来るように頼んだんだけどね……。
話を聞く限り、まさか、お姫様抱っこして連れて来るとは思わなかったけど……」
徨さんは、いつも妹がすまない、と言いながら苦笑していた。
「いえ、別にいつものようなことなので……」
「え？いつも抱かれているのかい？」
「それは初耳じゃ」
「え？いつでも抱いていいの？」
……これは、この人達は皆、僕を普段どういうふうに見ているというだろうか？
僕は、とりあえず、いつものこと（？）なので、とりあえず落ち着こうとコーヒーに手をつけた。
まだ湯気の立つ熱いコーヒーを飲みながら一息つく。
……うん、だいぶ落ち着く。

……さて、
「……それで？まさか徨さんが僕をお茶に誘うためだけにこんな目にあわせたわけじゃないですよね？」
もし、そうだ、なんて言ったら思いっきり殴ってやる。
「まぁ、今までのことからもう予想もつくんだろうね……」
徨さんは、ご名答、なんて茶化しながらコーヒーを啜る。
「単刀直入に言わせて貰う。『切り裂き魔』を捕まえて欲しい」
……あぁ、やっぱり、なんて嘆息している自分がいる。
本当は、そろそろ来るんじゃないか、なんて思ってた。

最近は平和過ぎた。

でも、この町は物騒過ぎた。

理由は一つ。この町に突如として現れた『切り裂き魔』こと『ジャック・ザ・リッパー』の存在。
そいつは人を殺し過ぎた。
警察はすでに動いていただろうが、殺人のことすらあまり多くは報道されていないことから、多分だが、警察は尻尾すらも掴んではいないのだろう。
―となれば、

「わかりました」

そいつも、もういい加減に、危険過ぎる。
―だから、

「その件、引き受けさせていただきます」

―答えはそれで十分だと思う。

3，人間観察　7／2（夜）

もう七月だというのに、外は妙に寒々しかった。
ついでに言うと、いつもより人通りも少なかった。
夜になり日がおち冷えたためか、それとも、件のジャック・ザ・リッパーとやらのせいか、
どちらにせよ、こんな曲がりなりにも大きな町の中を歩く限り、人間を見ないことないわけがなかった。
歩いているのは、
終電を逃したサラリーマン。
酔っ払いの親父。
仲間内に集まる不良学生達。
水商売の女。
夜のランニングをする青年。
塾帰りを迎えた親子。
コンビニの袋を下げた女。
自分が既に死んでいると気付かない女。
二次会だと騒ぐ学生達。
件の殺人鬼を警戒する巡回の刑事。
件の殺人鬼を一目見ようと歩く若い男女。
血の出るような殴り合い後だと思われる女子高生。
下手くそな鼻歌まじりに歩く黒人の男。
あくびを噛み殺しながら映画館から出て来た男。
ゲーセンへと入っていく若い男。
……ｅｔｃ……
それだけの人がいながら、件の切り裂き魔は捕まらない、見られないという。
まぁ、それも当然だろうか。

誰も好き好んで人前で悦楽や快楽の所業なんて見せはしないだろう。
そんなことをするやつはただの『異常』だ。　いや、だからと言って『殺人』という『罪』が普通なわけではないが……。
「まぁ、十中八九で殺るなら裏通り、かな？」
そんな当たり前のことを一人呟いてみる。
一人で呟いといて何だか、けっこう寂しい……。
もうだいぶ歩き、いつの間にか裏通りへと踏み込んでいる。
いや、まぁ、最初からそのつもりだったんだが、入ってみたらけっこう怖い。
そこは異様に暗く、町の街灯からの僅かな光だけが、裏通りの人のいない世界を照らす。
月は雲と高過ぎる建物の影に隠れて、ここにいる僕には見えない。
あ。でも、
「ここから先は危険ですよ？ケガをしたくなければ、……いや、生きていたいと言うのなら、そこより先に踏み込まず、お帰りになられたらどうですか？」
そんなことを考えていると、まだ明るい町と暗すぎる裏通りとの境界線から鈴のように木霊し、響く声。
「朋夜は以前たしかに私に言いましたよね。
まだ死にたくない、と」
そこにいたのは長い黒髪を風に流してたたずむ影。
「だというのに、貴方は死にたがっているかのように私を誘う」
そいつの姿は、月や街灯の混じった逆光でよくは見えない。
でも、僕はそいつをよく知っている。
「私は貴方を殺させたくも、貴方を殺したくもないというのに……」
鈴のように、墜ちる前の蝶のように、儚げにコンクリートに吸い込まれる小さなその声は、不思議なことに、しっかりと僕にも聞こえた。
「貴方は本当は死にたいんですか？」

それは、彼女に生まれた曖昧すぎる一つの疑問。
だというのに、なぜか僕はその質問について真面目に考えてしまった。
そして、無駄に真面目に考えたための答えが一つ。
「やっぱり、まだ死にたくないや」
昔、まだ僕達が幼い頃に、初めて彼女と出会った時と、変わらぬ答えだった。
そして、彼女は嬉しそうに笑っていた。
何が嬉しかったのかはわからないが、彼女の笑顔が嬉しそうに見えた。
「どうして笑うんだい？」
「それは嬉しいからですよ」
そう言って、彼女は、あの時と同じように、また嬉しそうに笑って、僕のすぐ隣りまで歩き、
「御久し振りです、朋夜」
「うん、久し振り。……とは言っても、そんな会わなかったって感じしないけどね」
嬉しそうな彼女の顔が急に不満そうに膨れる。
「朋夜はそうでも、私は久し振りに会えて嬉しいんですからね。
嘘でもそんなことは言わないで下さい」
……嘘でもって……。
「もう！聞いているのですか！？」
彼女、“斬原（きりはら）流香（るこ）”はなぜか怒っていた。
これは余談だが、その姿はまるで子供のようだった。
「はいはい、聞いてるよ」
何となく、微笑ましい気分になった。
実際はそうでもないとわかっていながら、彼女の本質を知っていながら、僕はそんなことを思っていた。
「それと、こんなとこにまで現れたってことは……—」
「えぇ。昼間のファミレスまで那和にお姫様抱っこで抱かれていま

したよね」
……そこからか……。
「ん？どうしましたか？」
「いや、別に……」
思いっきりうなだれる僕に、流香は、
「別に気にすることはありませんよ？
寝顔も女の子みたいで可愛かったですし」
笑顔でそんなとどめをさしてくれた。
「……いや、もう、いいや……流香も那和も趣味が悪いってもうわかっているから、いいよ」
「那和はともかく、私まで趣味が悪いとは酷い言い様ですね……」
口を尖らせて拗ねる彼女の横顔は、彼女の本質に似合わず、やっぱりどこか子供っぽいもので、つい、僕は笑ってしまっていた。
「……何を笑ってるんですか？」
……どうやら逆鱗に触れてしまったらしい。
流香は何だか怒っているようで、

―目はナイフのような殺意を孕んでいた。

「何を笑っているのか、と訊いているのです」

彼女の鈴のような声が凛と裏通りに響く。

曰く、それは戦慄の旋律。

曰く、それは殺意の奏曲。

曰く、それは――、

……そこで、

「……あぁ」
朋夜は、小さな溜め息と嘆息をついて、全部理解した。
考えれば、全部偶然だった。
今日、朋夜が裏通りに入ろうとしたことも。
今日、朋夜が流香に会えたことも偶然。
その理由を考えれば、そうすると笑っているというのは……―。
「そこにいたのか、切り裂き魔」
そう、件の切り裂き魔。
よく考えれば、そいつがこの町のどこかにいるというのだけは、幾多の殺人に裏付けされた必然だった。
そして、そいつを探しているという仮定があったからこそ、皮肉にも僕達はこんなとこで出会ったのだから。
なぜなら、そうでなければ、こんな『人が死ぬには打って付けの場所』で、彼ら二人が出会って何も起こらないはずがなかったのだから。
「隠れていたいならそのまま聞いてくれ」
朋夜は、その必然的な偶然に嘆息しながら、件の切り裂き魔に向けて呟いた。
「僕に殺られるのと流香に殺られるの、どっちがいい？」
朋夜は、感情の無い声で、切り裂き魔に向けて、たしかにそう言った。
「出て来ないならこっちから……―」
流香が、そう言いかけて、まるで獣のように体を地に這わせるように走る。
「こっちから行きますよ？」
そう言った流香の手には、どこにでも売られているような包丁が握られていた。
それから、僕から見た限り、切り裂き魔の行動は意外なほどに冷静だった。
切り裂き魔は物陰に隠れるのを止め、壁を蹴るように跳躍、その

まま手に握られていた二本のナイフを投げ付けた。
「―っ」
気合いの入った流香の包丁による一閃が、僅かな街灯に反射し銀色の曲線を描く。
キィィィンと、耳が痛くなるような金属がぶつかる音が響く。
一本は流香の足元に叩き落とされ、もう一本は朋夜の顔に目掛けて弾かれた。
「危ないなぁ」
朋夜は、何事もなかったかのようにナイフを弾かれたナイフを、指で挟んで、
「とりあえず返すよ」
そして、切り裂き魔に向かって投げた。
そのナイフは着地し、一瞬だけ動きの止まっていた切り裂き魔の足を、地面へと縫い付け、切り裂き魔は音の無い悲鳴をあげた。
「終わりですよ。切り裂き魔、ジャック・ザ・リッパー、快楽殺人者、……もう」
切り裂き魔と流香の距離が２m足らずになると同時に、流香は体の筋肉をバネに変えて、一直線に跳び、
「アナタはおやすみなさいな」
流香は、切り裂き魔の両腕を切断した。
「さぁ」
そして、僕は慌てて走り、
「殺してあげま―」
「止めるんだ」
僕は、流香の腕を掴んで、彼女が『人を殺すということ』を止めさせようとしていた。
「貴方は、どうして止めるんですか？」
「君は、どうして殺すんだい？」
「それは私の勝手ですよ」
「それなら止めるのも僕の勝手だよ」

「屁理屈にしてはくだらないですね」
「屁理屈のわりにくだらないね」
「離して下さい」
「離さないよ」
「殺させて下さい」
「殺させないよ」
「死にたいんですか？」
「死にたくないよ」
「ならば、邪魔なんかをしないで下さい」
「でも、しなければ流香はこいつを殺すでしょ？」
「……当然です」
「なら、絶対に離さない」
「―っ」「流香が殺さないと言うまで絶対に離さない」
「んなっ！？」
「答えは？」
「……殺します」
「ごめん、絶対に離さない自信はないや」
「……やっぱり止めます、いい加減にくだらないですし……」
けっきょく、流香は、不満そうに僕を睨みながら、しぶしぶながらも包丁を捨ててくれた。
「よしよし」
「……子供じゃあるまいし撫でてもらっても嬉しくありませんっ！」
僕は流香の頭を優しく撫でてあげたが、流香は顔を真っ赤にして怒ってしまった。
「……那和は喜んでくれたんだけど……」
「……那和みたいなのと一緒にしないで下さい」
どうやら、皆が皆、頭を撫でられて喜ぶわけではないらしい。
そう考えると、那和やうちの妹や学校の幽霊さんは例外か……？
「……何を考えているんですか？」
「いや、別に？」

僕をいぶかしむように見つめる流香の顔は、もう先ほどまでの本質『殺人鬼』らしさは微塵も感じられなかった。
「さて、もう眠いや」
「そうですか？私はまだまだ余裕ですね」
「そう。じゃ、またいつか、こんな夜の日にね」
「朋夜は、これからどうする気ですか？」
「え？」
「これからどうするつもりなのかと聞いているのです」
「どう、って、帰って寝るつもりだけど……」
「なら暇ですね」
「いや、だから、帰って…」
「暇ですよね！」
「眠…」
「暇なんですよねっ！」
「……はい」
……どうやら、
「では、これから私と少し……」
この町の女性達がくだらない切り裂き魔に怯える夜は終わっても、
「デートしましょう♪」
僕と流香との夜は、まだ少しの間だけ終わらないようだ。

Fin.

3，人間観察　7／2（夜）（後書き）

どうも、婀羅洙です。毎度ながら、こんな後書きまで読んで下さってありがとうございます。

それでは、これにて“殺人鬼とペーパーナイフ”の物語の一日目『人間観察』は完結です。

いかがでしたでしょうか？

幼馴染み×2なこの物語は、朝と昼では那和が、夜は流香が……

まぁ、ゲームの正ルート・裏ルートみたいな感じで良いかも？

まぁ、まだまだ色々とキャラを出していくつもりですが、とりあえずメインキャストは朋夜、那和、流香の三人で。

私個人としては、希代のロリっ娘を出せなかったのが酷く心残りな結果と……

……え？清人を忘れてるって？

大丈夫ですよ。彼は明らか過ぎる脇役ですから（笑）

では、また次回『無題』でまた会いましょう。

4，無題

―夢を、見ていた。

僕と流香が、初めて出会った時の夢。

たしか、あの時、僕達は何かよくわからないものに、殺されそうになった時のこと。

那和が泣いていた。

僕も泣いていた。

そんな時、流香が現れて…―

よくわからないそれは、流香から逃げた。

そして、流香は何を思ったのか、流香は流香を殺そうとした。

そして、僕は何を思ったのか、流香を助けてしまった。

「邪魔をするなら殺します」

「邪魔をしないと君が死ぬ」

「ではまず貴方から殺します」

「それは、いや」

「では邪魔をしないで下さい」

「それも、いや」

「わがままですね」

「わがままだよ」

「貴方、名前は？」

「九条　朋夜」

「では朋夜、」

―私は、貴方を、殺します。

それは、今も昔も上手くイメージ出来ないが、とても嫌な響きだったのを思い出す。

「何で？」
「貴方が私の邪魔をするから」
「そう」
「……死にたいんですか？」
「死にたくないよ」
「なら……」
「でもね」

夢で見た、とても懐かしい昔話は、僕の知る限り、そこで途切れてしまった。

◆

頭の芯まで響くような目覚時計の電子音に、深く沈んでいた意識が浮き上がる。
一番最初に目に飛び込んだのは見慣れた自室の天井。
目を何度か開閉させて、まどろみにもがいてみる。
それでも、何となく体が重く、嫌に気怠い。
体が、まだ睡眠を欲しているのが明らかだった。
「……ふぁ」
あくびを噛み殺しながらも、体を起こす。　カーテン越しに入ってくる日の光が妙に憎らしく感じる。

「……やっぱり、夜遊びなんてするもんじゃないや」
そう勝手に自己完結して、僕はまたベッドに横になる。
目覚めたばかりの意識は、再び深いまどろみの中へと、そのまま抵抗もせずに沈んでいった。

4，無題（後書き）

ども、婀羅洙です。

これを書いているのは朝の電車で終点まで寝る気満々の婀羅洙です。

そんなことはさておき、今回は主人公達が出会った時の夢のお話。
これはもう別のお話への伏線っぽいですが、
明らかにメインです。
伏線どころじゃありません。このお話の芯です。
まぁ、このお話を読んでちょっとした違和感や矛盾点を覚えるアナタ、……多分気のせいです。
軽く右から左へ流して下さい。

まぁ、次回からはあらすじでもある『秘密』に遠回りながら近付いていこうと思います。
では、次回『過剰睡眠』で、またお会いしましょう。

5，過剰睡眠　7／3（朝）

「……つまらないわね」
私、紫藤　那和は、とてつもなく退屈していた。
理由は単純で簡単。
「……何で朋夜は来てないの」
私の幼馴染みで、私にとって唯一の宝物と選挙とかで使う変な車で日本中で叫びまくっていいくらいの彼が、珍しく今日は学校に来ていなかった。
「……やっぱり昨日の件かのう」
この広島弁のゴリラみたいな体格をした日本男児っぽいゴリラは……まぁ、ゴリラだ。
彼は朋夜の友人であり、私に普通に話しかけられる数少ないクラスメートである。
つーか、朋夜を含めて二人のうちの一人だ。
「……まさか、ケガでもしたんじゃろうか……」
ゴリラは難しそうな顔をしながら、そう呟いた。
しかし、まぁ、朋夜がケガか……
……。
……。
……。
……ヤバい。私死んじゃう。
「ゴリラ、嘘でもそんなことは言わないでよ」
「ん、あ、あぁ、すまんけぇの……、ってゴリラ？」
まさかあの糞兄貴の依頼でケガなんて……
もし朋夜の可愛い可愛い顔に傷なんかついたりなんかしたりしたら……
「殺すわよっ！」

「な、なんじゃよ！？そこまで怒らんでも……」
「知らないわよっ！そんなゴリラよりも朋夜の命よ！
とーもーやー！！早く帰って来ーいっ！！」
那和のその心からどんな経緯から生まれたのかまったくわけのわからない『九条　朋夜が紫藤　那和の側にいない』ということがよくわかる叫びは、教室どころか、学校中に響き渡り、本日の希代の『問題児』のお目付け役の不在を学校中に知らせることとなった。
よって、飛び交う根も葉もない噂の数々。
九条　朋夜の不在は学校のテストの結果に一喜一憂する生徒達に、先生が作ったテストの配点が満点で９０点しかないという先生のくだらないミスよりも早く校内を駆け巡るのだった。

◆

「聞いたか？」
「あぁ、ついに宮田が退院したってな」
「いや、違っ」
「例の黒姫〈ダークネスビューティー〉のこと？」
「そう。それ」
「え？何それ？」
「田中は黒姫知らないの！？」
「紫藤　那和って言ったら緑永高校始まっていらいの問題児って有名じゃん！」
「へー」
「とにかくっ！その黒姫のお目付け役が今日は学校に来てないんだってさ！」

「マジ？黒姫が暴れたらどうすんのさ！？」
「それってヤバいんじゃね？」
「ケガじゃすみませんね」
「先生達が今日の黒姫のクラスの授業をほとんどを自習にしちまったらしいぞ」
「本当に？でもまぁ、わからなくもないわね……」
「それで、九条は何で来てないの？」
「わからない」
「何か何の連絡もきてないんだってさ」
「例の黒姫にも言わずに休んだらしいわよ」
「この時間だと寝坊ってわけじゃなさそうだな」
「風邪とかかな？」
「もしくは事故とか？」
「ケガかも」
「痔じゃね？」
「そういえば昨日夜中に誰かと歩いてたから、その時に……」
「それ黒姫とじゃねぇの？」
「そうなら黒姫も休むわよ」
「あぁ、そうか」
「じゃ、アレかな。最近噂のブラック・ジャックに襲われたとか？」
「……ジャック・ザ・リッパー？」
「ありえる」
「九条君はその辺の女の子よりずっと可愛いしね」
「つーか俺の彼氏にしたい」
「え？お前ってゲイ？」
「私は彼に首輪つけて飼いたいな」
「え？貴女はサディスト？」
「つまりあれかい？今日は朋やんは病欠ってわけかい？」
「……みたいですわね」

そして、そんな感じに、九条　朋夜の欠席は話題として大きく拡大を続け、通知表に欠席一はどう足掻いても取り消せないものとなっていき、

「朋夜が夜中にどこぞの女とイチャついて風邪を拗らせて肺炎になって病院に行く途中にジャック・ザ・リッパーに襲われたですって！？」

「じゃけぇ、どうやら大変なんじゃよ！」

まったくもってありえないくらいに九条　朋夜の欠席の原因は遺伝子組み換え、合成着色どころではないくらいに肥大化した頃に、彼の友人・武蔵　清人の耳に伝わり、清人の口により黒姫こと紫藤

那和の耳にも、もはやくだらないジョークにも達したそれは、学生が午後の授業に向けて一息つくための昼休みに入るよりも早く伝えられたのだった。

「私というものがありながら他の女とレインボーブリッジまで夜のドライブなんて……！」

「いやいや！注目するべき点はそこじゃないんじゃよ！」

昼休み前でさすがに午前の授業に飽きていたためか、それとも単に那和達が目立つためか、新たにレインボーブリッジでデートということには誰もツッコまず、教室にいた人々は那和と清人の会話に耳を傾けていた。

「あまつさえ車の中で×××して×××や×××まで……！

私ですらしたことないのに……！」

そして、那和の口から吐き出される女子高生が白昼堂々にしては卑猥な言葉の数々に同じ教室にいたものは赤面した。

とにかく、そんなこんなで、九条　朋夜についての噂はますます広がりを続けていたのだった。

「ねぇねぇ聞いた聞いた？」

「何が？」
「実はね……」
そして、それは大半の学生が午後の授業に向ける力を貯めるための食事時には普通科にそれを知らないものはいなくなり、ついには緑永高校の書道、美術、音楽などの各芸術クラスにも触れ回り、
「え？兄さんが変質者に襲われて重傷？」
芸術科・音楽クラスに在籍する彼の義妹の耳にも入ることとなったのだった。

5，過剰睡眠　7／3（朝）（後書き）

ども、毎度ながらこんなとこまで読んで下さってありがとうございます。

最近はけっこう楽しくいい感じのペースで書いてますが……―

―…これって本当にジャンルは学園でいいのか？

―と、思い始めた今日この頃。

まずタイトルの『殺人鬼とペーパーナイフ』なんて明らかに学園もの っぽくありませんしね……

まぁ、とにもかくにも、今回でやっと五話ということで、それなりにこの作品にも慣れてきたわけですよ。

まぁ、何せプロットも無しに書きながら考えて書いてましたから、書いてて楽しいけど後がどうなるか自分でもわからない伽藍となります。

まぁ、とにかく、読んで下さっている方々へ、

こんなんでも気に入っていただけましたら幸いです。

もし、よろしければ、作品のここを直した方が良いとか、ここが面白いとか、どんなキャラが良いだとかなどの評価や感想など述べていただけると嬉しいです。

さてさて、それではまた次回の後書きでお会いしましょう♪

6，過剰睡眠　7／3（昼）

「っくしゅん」
僕以外に誰もいない部屋にくしゃみが響いた。
別に部屋が冷えていたわけでもなく、僕が夏風邪をひいていたわけでもない。ハウスダストか何かだろうか？
とりあえず僕はなぜか良く寝てた気がする。何かもう気持ち良いとかを通り越して安らかなくらいに寝てた気がする。
とりあえず、僕は開け放たれたカーテンから降り注ぐ光にひるみながら、ベッドの下から枕元に置いてあったはずの目覚時計を拾い、時間を確認した。
【ＰＭ　０１：３０】
……うん。どう考えても遅刻だった。
それはもう見事過ぎるくらいにお日様も真上から傾いて来ているじゃないか、今日の天気は曇りだけど。
もう今からだと朝ご飯を通り越して昼ご飯でいいじゃないか。
つーか、今日っていつも通りの平日だよね？思いっきりサボっちゃってるけど……ま、一日くらいいいや。別に皆勤賞狙ってたわけじゃないし。　とにかく、何か目が覚めたらお腹が空いてきている感じがする。
この家に住んでいる僕の知らない誰かが僕のために豪華な料理でも作ってくれないか、なんて考えてもそれは虚しすぎる妄想で終わってしまう。……まぁ、とにかくお腹が空いた。
「とにかく起きるかな」
特に誰に言うわけでもなく、僕は一人呟きながら、もそもそとベッドから這い出て、とりあえず顔を洗うことにした。が、
「……あれ？」
ふと、違和感を覚える。

例えば僕は寝る前にカーテンを開けていたかとか、何で目覚時計がベッドの下から出てくるんだとか今さら気になってきた。

……昨日は暑さで寝苦しくなって知らずのうちに夢遊病でも発病させてしまったのだろうか。

「……まぁ、いいや」

とにかく、目覚めたばかりの働かない頭で考えてもしょうがない。とにもかくにも、朝ご飯兼昼ご飯でも作りながらこれからの予定でも考えるとしよう。

僕はそう結論付けて、寝室からキッチンへとまっすぐに向かった。

キッチンからは温かいお茶の良い香りが………………………………何で漂ってるんだろう？

ここに来るやつは限られてるし、多分そいつらは皆学校に行って勉学に勤しんでるだろうし……………………………………………………あれ。もしかすると、まさかまさかの不審者、つーか不法侵入者？

「…………………」

寝耳に水どころじゃないじゃないか。まったく朝っぱらから（すでに昼過ぎ）変なやつが家に来たらびっくりもんだ。

僕はとにかくどんなやつが勝手に人の家でお茶なんか淹れているのか一目見ようと息を殺しながらキッチンを覗きこみ、

―ガブリっ。

「へ？」

ガジジ―と、お尻を噛まれた。

「いったあああぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そして僕は殺していた息を全て体の外に吐き出すかのように叫んでしまった。

って、ヤバいです。せっかく息を殺しながら覗いて警察呼んで我が家を守る気だったのにいきなりの伏兵によって不法侵に―

「―な、何事ですかっ！？」
そしていきなり飛び出してきた不法侵に……あれ？
「……冴？」
「はい。あ。勝手ながらお邪魔してますね」
と、言ってどこか嬉しそうに微笑む僕の唯一の義妹。
だがしかし、今は、
「じゃあ、僕を噛んでるお前はポチか！？」
「ポチも兄さんに会えて嬉しそうですね」
あのね。いくら嬉しくても普通は後ろから噛んだりなんかしないんじゃないかな、とお兄ちゃんは思うよ？
……まぁ、とにかく、
「久し振り、冴」
「えぇ、御久し振りです。兄さん」
久し振りに義兄妹で会えたためか、僕の義妹、“九条　冴”は、両の目に巻かれた包帯に覆われたの上からでもわかるくらいに、本当に嬉しそうに、微笑んでいた。

◆

私の淹れたお茶を啜った後、兄さん、紫藤　朋夜は私がお昼をまだ食べていないと聞いて、成長期の女の子は三食ちゃんと食べなさいと、自分は昼過ぎまで寝ていたくせにそんなことを言っていた。
私がそれを指摘すると、兄さんは語尾を小さくして、それもそうだね……なんて言いながら、とりあえず何か作ると言って、彼は私をキッチンから追い出した。
少しくらいは手伝いたいとも思ったが、それはしょうがない。

私がキッチンに入って『私』というものを知らない兄さんによけいな心配をかけてしまうだけだろう。
だって私は世間的には両の目がすでに光を失っているということになっているのだから、……あ。いや、普通に失っていますが。
私が『視力を失っている』という代わりかどうかは知らないが、私には二つの異能があった。
一つは『視る』ための力。
一つは『創る』ための力。
まぁ、『視る』ための力はともかく、『創る』ための力の方は一般人の前では出来ないようなものだが……
―と、そういえば、この目になってから随分と経つな、とか、この目のせいで兄さんの優しそうな顔を普通に見ることができなくなったなぁ、とか、つーか兄さんが包帯コスの女の子が趣味だったら良いなぁ、とか、そういえば
「兄さん全然ケガなんかしてないじゃん！心配して損した！でも良かった！」みたいな……
とりあえず一人になるとそんなくだらない考えが溢れ出してきた。
「まぁ、化け物な私じゃダメでしょうけどね」
そして、そんなことを思う度に自嘲的な笑いが込み上げてくる。
以前、あんな『殺人鬼』に言われた言葉が頭の中で何度も何度でも繰り返される。

『私も貴女も立派な化け物じゃないですか』

決定的すぎる『同族嫌悪』。　そしてそれを抱いてしまったために気付かされた『私』というそれ。
私はあの闇にたたずむ『殺人鬼』と、同族と認めたために彼女に『同族嫌悪』を抱いていたのだから。

だから、私は、『私』というそれは……
「冴ー。そうめんにマヨネーズいる？」
……少しネガティブチックになっていた思考は、兄さんのその呑気な声に吹き飛ばされ、自分でもわかるくらいに自嘲的な笑いは知らずのうちに自然に綻ぶ。
まったく、なんて私は単純なんだろうと思う。
愛しい兄さんを想って悩んでも、その兄さんがいればどうでもいいなんて思える私は、
—どんなに愚かで幸せものなんだろうか。
ねぇ？『殺人鬼』さん？
「冴ー？それともソース？ケチャップ？タルタルソース？」
「……兄さん。普通の麺つゆは……？」
「無い」
「……マヨネーズで」
しかし、ま。あの『殺人鬼』のことを思い出したのは本当に久し振りだ。
……あぁ、そういえば、あの『殺人鬼』さんは、あの時、なぜ私を知っていたのでしょうか。
それと、もう一度会えたら『私』を『化け物』というカテゴリーから救ってくれる最愛の兄に会わせてあげたいものだ、なんて思った。

7，過剰睡眠　7／3（夕）

「そういえば、兄さん、黒姫さんと、…その、……お付き合いなさっているとは…、本当……です…か……？」

僕が赤いケチャップソーメンをちゅるちゅると音を立てながら食べていると、冴はいきなり思い出したように装っているかのような不信さ全開で、そう訊いてきた。

「…その、どうなん、ですか……？」

なぜだか、冴は顔を真っ赤にして怒っているようにも見える。

そういえば、義父さん母さんの溺愛ぶりからして、昔から冴はそういったことが苦手だったな、と思う。

たしか、視力を失う前は幾多数多のラブレター（うら若き乙女のものも含む）に顔を真っ赤にしてうろたえては返事は全て『Ｎｏ』。

視力を失ってしまって目に包帯を巻いても実際はその可愛らしい顔を隠すどころか、むしろ目立たせてしまって、ラブレターはたしかに無くなったが、体育館裏、校舎裏、夕方の教室、そこで告白すれば成功するとかいう杉の木の下……。とにかく、ラブレターの代わりに直接的、積極的になった人々（男女ともに）に毎度毎度泣き出しそうになりながら困っていたのを思い出す。

まぁ、僕が知ってるのは、僕が高校に上がってから両親に無理を言って一人暮らしになるまでの間だから、彼女が高校生になってからは知らないが、

「ど、どうなんですかっ！」

……おいおい。口からマヨネーズソーメンが飛んでるよ？

自分から切り出したその話で何を想像してるか知らないけどそんなに興奮しなくても……。

……まぁ、とにかく、昔からあいも変わらずそういうのに免疫の無い清純派女子高生ってことにお兄ちゃんは安心だよ。

「兄さん！聞いてますか！？」
「ん？あ。聞いてるよ。……ってゆーか、それ以前にとっても訊きにくいんだけど、いや訊くけど……だーくねすびゅーてぃーって何？」
「……へ？」　冴は、手に折れるんじゃないかというくらいに握ったお箸をポロリと落とし、
「……あ、え？」
ぽかんとマヨネーズで汚れた小さな口を大きく開いて固まっていた。……いや、だって知らないものは知らないし。
「それに僕は誰とも付き合った覚えなんてない寂しいうえにまったくもてないクラスで地味な少年だけど……？」
だって本当に彼女いない歴イコール年齢なんだもん。だーくねすびゅーてぃーなんて怖そうな名前の人なんて知らないし付き合った覚えなんて毛頭無い。
「知らない？黒姫を……？」
「うん」
本当に、と再度尋ねる冴に、僕は首を縦に振ることで応えた。
それだけで、僕が嘘をついていないとわかったのか、冴はとても大きな溜め息を一つつき、
「もし本当でしたら引きずってでも家に連れ帰ってましたよ」
そんなことを言って、安心したように笑っていた。……いや、ってゆーか、引きずってでも家に連れ帰るって……そんなにだーくねすびゅーてぃーさんはヤバいの？　それとも、それは僕には恋愛の自由も無いってことかい？
「……さて、と。では兄さんの安否も確認できましたし、そろそろ私は帰りますね」
唐突にやって来た冴は、唐突に帰ると言い出し茶碗を流しへと下げ始めた。
「何？もう帰るのかい？」
「えぇ。コンクールも近いですし、今日はもう家で練習しようかと」

学校もサボっちゃいましたしね。と、悪戯っぽく、可愛いらしく冴は笑った。
「もっとゆっくりしていけば良いのに」
「……そうした方が良いですか？」
「いや、忙しいなら別に……」
「いて欲しいんですか？」
「いや、別に無理にとは……」
「いて欲しいんですよね？」
「……いて欲しいです」
じゃあ、もう少しここにいます。と、冴は嬉しそうに学校から持って帰って来ていた荷物をつめた鞄と見慣れない箱を持って座り直した。
「……それは？」
「うふふ」
そして、冴はいつにもまして嬉しそうに笑いながら……―。
「ちょっと待てー！何を学校サボってイチャイチャラブラブしてんだー！？」
「んなっ！？那和！？」
「っ！？貴女！？」
「や、やりすぎじゃ」
どかーん、と扉が吹っ飛んで、憤然という感じで現れた紫藤　那和と、後から慌てて現れた武蔵　清人。……いや、良く考えたら、清人はいつものように那和に巻き込まれての不可抗力とかかもしれないけど、那和も思いっきり学校サボってここに来てるんじゃないのか？
「あの、那和……？」
「つーか私もソーメン一丁！タルタルソースで！」
「わしはケチャップで」
「あ。うん。ちょっと待ってて」
「ちょっ兄さん！？」

そして、突然の来客とか妹の驚愕の声を気にせず、朋夜は友人のためにソーメンを茹でに台所へと消えていったのだった。

◆

「あぁ、そんな馬鹿げた話を信じて、学校サボって、ここまで来てくれたのか」
「……気の毒じゃが、学校中に広まっとるけぇ……」
……良いですよ。どうせ僕みたいな根暗なやつはそういうのも気にしませんよーだ……。
「……それで本当にケガとかは無いんじゃろうな？」
半ばどころか全開に落ち込む僕に、清人だけはそんな卑猥すぎる噂話より僕の安否をしてくれたことに感動を覚える。
見た目に似合わず、優しい彼らしいその言葉に、僕は思わず涙が零れそうになった。
「……清人」
「なんじゃ？」
「やっぱり君は友達、いや、僕の親友だよ……」
「……何で涙目なんじゃ？」
……それは君が優し過ぎるからだよ。
「……いや、君みたいな友人を持って幸せだなって……」
だって、僕の命と名誉と人権とかをいつも心配してくれる唯一の友人だもの。たしかに那和や冴も心配してくれたみたいだけど、僕が普通にしているのを見るや人の家で好き勝手やるような……—あれ？
「そういえば、あの二人は？」
今更だが、那和と冴の姿が見えない。

ケータイは、っと、冴は持ってないし、那和は……は？……何？この嫌な予感がして止まない内容の流香からの殺人予告メール……。「……そういえば、二人ならさっき食器を洗ってから出ていったきりじゃけぇ。どこいったんじゃろうな？」

「……まさか」

本当に嫌な、最悪のイメージが頭の中を過ぎる。

「―ごめん！少し二人を探して来る！悪いけど留守番頼む！」

そして、僕は戸惑う清人が応えるよりも早く、

「―っ、……流香のやつ、人の妹を殺ってはくれるなよ……！」

僕は家を飛び出していた。

To Be Continued…

7，過剰睡眠　7／3（夕）（後書き）

どうも、大会が近いくせにゲーム三昧な大学生こと婀羅洙です。

えー…今回のお話『過剰睡眠』はいかがでしたでしょうか？

ちなみに今回はコメディーチックなお話から次回はシリアスな感じに続くみたいな……どんだけベタなオチだよ！？

―と、いう感じのお話となります。

うん、まぁ、ノリノリでいったら何か平和過ぎるノリで普通に学園ものになりそうだったので（※『殺人鬼とペーパーナイフ』は痛快学園ラブコメディーです）

―こんな展開にしちゃいました（笑）

さてさて、まぁ、とにもかくにも、次回は“妹　ＶＳ　殺人鬼”となる“妹萌　ＶＳ　ヤンデレ”のヒロインポジションをかけた対決『死線交差』をよろしくお願いします。

8，死線交差（前書き）

さぁさぁ、『義妹　ＶＳ　殺人鬼』のはじまりはじまり。

8，死線交差

私が、光を失ったのは、紅い、紅い、生暖かい雨の夜だった。
「……あ」
その一面の紅の光景に、思わず声がこぼれる。
それは、紅い雨……とでも言うべきだろうか……。
それは一時的なものではあったが、たしかに雨であった。
ただ一人を中心に降り注ぐ、何とも鮮やか過ぎる紅い雨。
それが止んだ後、生暖かい紅い水溜まりの中心にそいつはいた。
ただ立っていただけのそいつは、全身を紅く染め上げ、その紅に染まらぬ強い朱の瞳を輝かせ、たたずむそれは、思わず見とれるほどに、狂おしいほどに、猟奇的なまでに美しかった……。
でも、それは、たしかに、どうしようもなく……
「……私……？」
ガラス張りの窓に、まるで鏡のように光が反射して映し出された、……私だった。
「……あ」
自分の手を、髪を、肩を、体を、抱き抱えるように、その感触を、感じ始める。
紅く染まった色。
体を覆う生暖かさ。
耐えがたいまでの生臭さ。
どうしようもない、悦楽感、快楽感、高揚感。
身体が熱を持って、衝動を持って、訴えかける。
「……あ、…は…は……」
どうしようもなくこぼれ出る『私』という何か……。
ふと、もう一度、確かめるように、そして認めるために、鏡を見る。

「……あは、…はは……」
そして、そこに映る『私』は…―
「あははは…―」

―たしかに、笑っていた。

◆

「どうしたんですか？」
ふと、かけられた声に、無駄に嫌な記憶に浸っていた意識が呼び覚まされる。
わずか数歩先にたたずむ黒髪をたなびかせるそれに、私は意識を向けた。
「私を呼び出したのは貴女でしょうに、私を呼び出すくらいなら、……殺る気なんでしょう？」
そんなに気を抜いてていいのですか、殺っちゃいますよ。……と、口調やイメージできる顔に似つかわない言葉に少し、……というか、

凄い戸惑う。
だってこいつは何かお嬢様キャラだとか何かそんな感じだと思ってたら案外そうでもないんだもん……。
「……まぁ、いいか……」
「……？何がですか？義妹？」
「……義妹言わないで下さい」
「義妹でしょう？」
「貴女の義妹ではないです」
「今は、ですね」
「……どういう意味ですか？」
「そのままの意味ですよ」
「……そうですか」
「これでも私、朋夜を気に入ってますから」
「兄さんに手を出すなら私が例外なく殺しますよ？」
「怖いですねー。さすがブラコン」
「ブラコン言わないで下さい」
「ブラコン」
「……」
「ナイチチ」
「……っぐ」
……たしかに無い……。
……は。……落ち着け。とにかく落ち着こう。
何かもうすでに闘う前から負けてるような気がしてならないが、とにかく落ち着け。
「とにかくっ！貴女が兄さんに近付くことは許しません！」
私は、彼女『殺人鬼』にそう告げ、包帯の巻かれた両目に意識を集中する。
―見え始める、世界。

―見え始める、意識。

―見え始める、その在り方。

虚空に手を翳し、体をその世界に慣らすように、簡単な短剣をイメージし、『創る』。

「―っ！？」

創り出した短剣を『殺人鬼』に向かって放つ。短剣は皮一枚裂くことはなく、後の壁に突き立つ。

「……凄いですね。以前に会った時よりも早く正確に能力を使いこなしてますね……」

そんなことを言いながら、『殺人鬼』は、嬉しそうに、楽しそうに、無邪気な子供のように微笑んでいた。

「貴女こそ。以前の貴女なら傷の一つは負っていたでしょうに」

ってゆーか、手慣らしとはいえ殺る気満々だったのに……。

「それでは、今度はこちらから」

不意に、『殺人鬼』から殺気が放たれ、私は一歩退いた。

『殺人鬼』は壁に突き立った短剣を引き抜き、私に向かって一直線に疾走。私はそれを止めるためにその軌道上に壁を創る。

「まだ甘い、ですね」

だが、それは一時凌ぎにも過ぎず、『殺人鬼』はいきなり現れた壁をいとも簡単に避けて、再び私に向かって疾走を始めた時、

「甘い、のはどっちですか？」

壁が爆発し、その爆風に『殺人鬼』は飲み込まれ、壁に叩きつけられた。

そして、吹き飛ばされた『殺人鬼』に、私は追い討ちをかけるように、槍、刀、短剣、斧を創り放つ。

「―っ」

短い舌打ちが、放たれた刃が弾かれる音に混じって響く。

「凄いですね。でも……―」

まだ甘い。その放たれた武器は、
「それ、爆発しますから気をつけて下さいね」
再び爆発。その爆発は衝撃で空気を飲み込み、震わせる。
土煙が上がるが、それすらも飲み込み衝撃へと変える爆発。それほどの威力を創った。けっこう離れた場所にいる私までが予想以上の威力に吹き飛ばされてゴミバケツに突っ込むほどの威力だ。
……ってゆーか、生ゴミ臭っ。今さらだけど裏路地だからってこのゴミの量はどうなんだろうか……？
「けほっ……あ、危ないですね……」
……まだ生きていたのか……。普通の人間ならもう良くて気絶とかなんだけど……。
「ってゆーか、やり過ぎです！いくら義妹でももう許しませんよ！」
「ってヤバいじゃないですかコレ！？」
私はゴミバケツから身を起こそうとしたが、
「っんなああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
すみません。焦り過ぎました。まさかバナナの皮で転ぶとは思いませんでした……。
「……だ、大丈夫ですか？」
……あ。なんかこの人、実は良い人かもしれない……。
「……だ、大丈夫です」
「では気を取り直して……」
切り換え早っ！やっぱり良い人じゃないかも……
「何を」
「え？」
「殺し合いの最中に油断なんかしてるんですか」
背中からコンクリートで舗装された道路に叩きつけられる。
背骨を通じて体を走る痛みに意識が墜ちかける。
皮肉にも、今、間違なく最悪の状況だけが辛うじて意識を保たせる。
「あんなドジっ娘要素を見せなければ、私が殺られてたかもしれな

いですね」
……本当に、最悪だ。
「もう貴女に勝目はありませんよ」
首に、自分が創った短剣が押しつけられる。
「この密着状態なら、貴女、大したことはできないでしょう？」
体に馬乗りになりながら、『殺人鬼』は私にそう告げた。
「この距離なら創っても飛ばせませんし、爆破もできませんね。貴女、いかにも近距離じゃ闘えなさそうですしね」
『殺人鬼』が、本当に楽しそうに私の両目に巻かれた包帯を指先で撫でる。
……あぁ、もう本当に嫌だ。こっちが一番闘いたくない近接に持ち込まれるとは……。
「まったく……本当に油断しましたね……」
「今さら、ですね」
「残念ですが……貴女が、ですよ？」
一瞬。本当に一瞬。顔から笑みが意味がわからないと言わん許りに剥れ、
「その首輪。似合ってますよ『殺人鬼』さん」
やっと、『殺人鬼』は気付いた。
自身の首についた首輪と、両手首の腕輪に一瞬顔を驚愕に歪め、首につけられていた短剣の刃が首からわずかミリ単位でだが離れる。
私はそれを見逃さないし、逃さない。
一気にイメージする、絶対に千切れることのない、絶対に切れない……―
「―鎖」
『殺人鬼』につけられた首輪と腕輪が、虚空より創られた鎖に繋がれる。
「―っ！？義妹にそんな趣味があったなんて！？」
「人聞きの悪いことを言わないで下さいっ！」
……鎖で繋いで絶対絶命だというのに何でこんなに緊張感が無い

のだろうか……。
それどころか、どこか楽しそうにも見える。
……こいつは、危険過ぎる。―そう、本能が訴え続ける……。
「―っ」
私は、全神経と集中力を、創るという一方向のベクトルに合わせ、創り出す。
―必殺。
「ちょっ！？ギロチンって！冗談になりませんよ！？」
『殺人鬼』のその細い首がギロチンという処刑台にはめ込まれ、さすがに焦り始める『殺人鬼』……。
「終わりですよ。『殺人鬼』……いえ、紫藤　那和」
キッと、完全に笑みの剥れた、圧倒的なまでの殺気を込められた瞳が、私を捕らえる。体が弛緩するのを、意識が飲まれてしまいそうなのを、必殺のギロチンを維持しているという絶対の状況だけが、私を支える。
「私は、斬原　流香だ……！」
キツく睨みながら、唸るように吐き出される『殺人鬼』の名。
―だが、
「それでは、一つだけ質問を」
貴女は、紫藤　那和の何なんですか？
それは実にくだらない質問だった。
「……見ての通り、同一人物ですよ」
私が斬原　流香と名乗る紫藤　那和に問うたそれに答えた彼女は、私が噂のみで知る『黒姫』のイメージとは一致しない。
しかし、さっき兄さんの家で会った彼女、紫藤　那和は、
今、ここにいる、ここまで一緒に来た、紫藤　那和は、
「……斬原　流香、と言いましたね……」
間違なく、数年前にも命を賭して殺り合った『殺人鬼』、斬原流香だった。
「……えぇ。私は、」

それは、普通ならば、ありえない、反則過ぎる答えだった。
「間違なく『斬原　流香』であり、『紫藤　那和』ですよ」
まぁ、那和は私を知りませんがね。―と言って、彼女はまた笑った。
そう。本当に今さら、兄さんの友人、紫藤　那和は、自らを『殺人鬼』と定義する、斬原　流香だということだ。

8，死線交差（後書き）

ども、婀羅洙です。
今回のお話『死線交差』では最初っから最後まで闘う女の子の物語となりましたが、お楽しみいただけたでしょうか？

何かもう妹は何でもありすぎるだろう、とか、流香は流香で緊張感なさすぎだろうとかもうツッコミどころが満点なお話に……。

つーか、書いてる本人が言うのもなんですが……

ヒロインが二重人格って…！？

まぁ、ここまであらすじでもある『秘密』を引っ張っといてそれは『二重人格』って、何か地味な結果に……。

さて、まぁ、とにかく気を取り直して次回『人格傷害』にて、またお会いしましょう。

9，人格傷害　7／3（夜）（前書き）

今回はちょっとばかし短い『義妹　ＶＳ　殺人鬼』完結。

9，人格傷害　7／3（夜）

私。九条　冴は、現在、とある殺人鬼を捕まえて、そいつが多重人格な方で、しかも何か無駄に強くて、私の兄さんの御学友であるという世にも奇妙な状況にある。
「いい加減にコレ外して下さーい」
さすがにこの状態が３０分も続くと緊張感も薄れてきたようで、斬原　流香はそんなことを言い出した。
いや、まぁ、もとから彼女に緊張感なんてなかったが……。
「……こんな状況ももう飽きたんですけど。ってゆーか、どうせ殺る気が無いなら離して下さいよー」
「だって、どうせ離したら私を殺そうとするでしょう？」
「しないですよ？」
「しますね」
「しないですってば」
「信用できません」
「妹。お義姉ちゃんを信用して下さいよ。」
「誰が妹ですか。誰がお姉ちゃんですか……。」
「お姉ちゃんじゃなくてお義姉ちゃんなんですが……」
「なおさらです！」
「嘘は言ってないでしょう！」
「いやっ嘘でしょうが！？」
「いいじゃないですか。那和はその気みたいですし」
「断固としてさせません！！」
「ってゆーか私がしたいです！」
「それこそ断固として却下です！！」
ギャーギャーと、二人分の叫び声が裏通りの建物に反響して響き渡る。近隣住民……はいないだろうが、周りなど関係なしにギロチ

ンに首と両手首をハメたままの彼女は意味もなく暴れ始め、
「うぅ……。このギロチン邪魔すぎですよ……」
……けっきょく外せないで半泣きになってしまっていた……。
「……いや、何かもうどうでもいいです……。とにかくっ外しますけど、もし何か危なげなことをやろうとした瞬間に―」
私は、ギロチンを外すと同時に彼女の首に鎖付の首輪を、頭には犬耳付カチューシャを創りつける。
「……その犬耳と首輪を爆発させますからね……。
……だから私の首に今にも刺さりそうになっているこの短剣を今すぐに捨てて下さい……」
ギロチンが消えると同時に、犬耳と首輪が装着された彼女が一瞬で距離をつめて来ていた。……本当に油断ならない……。
「―っ、義妹の素直過ぎるドジっ子ぶりに免じて許してあげま……」
「……3、2…」
「……？…何を数えてるんですか……？」
「…0」
ボンッと音を立てて小さく爆発する犬耳（左）。
犬のコスプレした彼女の写真が撮れなかったのは惜しかったが、まぁ、命には代えられないってことで……。
「何するんですか！？殺す気です……っか！？」
またもや彼女の頭上で爆発。今度は威力が先ほどよりも強めな犬耳（右）の爆発が彼女を地面に叩き伏せる。
彼女が手放した短剣を拾い上げ、刃の先でつついてみる。
「……今度こそ寝てますよね」
どれだけつついてもまったく反応がない。本当に今度こそ気絶したようだ。
やっとこの危険人物が沈黙したことに緊張の糸が切れ、溜め息がこぼれる。
倒れた斬原　流香の上に腰掛けながら空を見上げて見る。
「……少し、冷えますね」

見ようと思えば見える、今の私には見えない、青いのか、白いのか、赤いのか、黒いのかもわからない空を見上げながら、

「……兄さんは譲りません」

私はそんなことを呟きながら、思わずその自分の言葉に赤面していた。

１０，人格傷害　７／３（夢）

それはとてつもなく暗く、ただ広いだけの、『私』が中心であるだけの、何も無い世界だった。
その暗さは、『私』までも飲み込んでしまうほど暗くて、『私』と暗闇との区別さえも飲み込んでしまっていた。
その広さは、『私』を浮き彫りにしてしまうくらいに広くて、『私』がその辺の小さな欠片と同列だという錯覚さえ覚えた。
そして、その世界は、本当は『私』というものすら無いのではないか、というくらいに、『私』しか無い世界だった。
そして、そんなところに『私』は生まれて、育ち、そして、

―そこで死ぬ。

そう思っていた。
だが、意外なことにそうではなかったらしい。
ただただ、何もせず、ただただ、膝を抱え、ただただ、『私』を殺すだけのその世界で、朽ちていく、そう思っていた。
その世界の見えない壁が、音を立てて砕け散るまで、『私』はそう思っていた。

◆

「……」

初めて見た外の世界に、『私』は沈黙した。
初めて見た外の世界は、流れる風を経て、照り続く陽射しを経て、この世界という在り方の全てに、『私』は畏怖を覚えた。
今までいた『何も無い世界』と『何もかもがある世界』との違い。
それは大きすぎた。
いきなりそんな大きすぎる揺籠から放り出された『私』は、立っているだけで精一杯だった。
世界が『私』を引き受ける。それを『私』という存在は必死で拒む。
目が熱い。頭が痛い。手が痺れる。呼吸が出来ない。心臓が破裂しそうだ。……心臓……？
その時、『私』は思った。

この心臓が止まれば、『私』はこの息苦しい世界から開放されるのではないか……。
そう、この心臓さえ……
『私』は、たまたま目についた、尖った銀色の妙に冷たいそれを、自身の左胸に……—
「—止めなよ」
急に響いたその声に、『私』は手を止めて振り返っていた。
なぜか、その声を、『私』は拒めなかったからだ。
「邪魔をするなら殺します」
拒めなかったから、『私』はその声を拒もうとした。
「邪魔をしないと君が死ぬ」
「ではまず貴方から殺します」
「それは、いや」
「では邪魔をしないで下さい」
「それも、いや」
「わがままですね」
「わがままだよ」

「貴方、名前は？」
「九条　朋夜」
「では朋夜、」

―私は、貴方を、殺します。

それは、『私』がそいつを拒む意を込めた絶対の言葉……のつもりだった。
だが、なぜか、そう、言っただけで、心臓が破れそうなまでに痛かった。
でも、あの時は、そんなことはあまり気にしなかった。

「何で？」
「貴方が私の邪魔をするから」
「そう」
「……死にたいんですか？」
「死にたくないよ」
「なら……」
「でもね」
そして、それが、
「僕は君が好きだから死んで欲しくないんだよ」
―私を生かしてしまった。
そんな単純な言葉が。
今思えば、『私』ではなく、紫藤　那和に向けられた言葉であったのだろうが、今は『私』も紫藤　那和だ。
そう。『私』は、

１０，人格傷害　７／３（夢）（後書き）

ども、婀羅洙です。

えー…今回の人格傷害はこれって途中で切れて、中途半端に書いて間違って投稿しちまったドジっ子ぶりを発揮したわけではございません。

だってこのまま過去話は引っ張るつもりですもの。

引っ張っといて伏線貼って、……ってのが理想ですよね。

とりあえず、今回の人格傷害は次のお話で終わる予定です。

では、また次回♪

11，人格傷害　7／3（夜）

「あ。兄さん」
聞き慣れたその声が耳に届いたのは、『殺人鬼』斬原　流香が好む裏通りに踏み込もうとした時のことだった。
「こんなところでどうしたんですか？」
暗くてよくはわからないが、顔に巻かれた包帯が額から浮かぶ汗に少し湿り気を帯びているようにも見える。あくまでイメージだが。いや、だって……
「……いや。僕よりもその、…冴が背負ってるそれは……？」
「え？……あぁ、これですか」
『それ』とか『これ』とか言われてる冴に背負われているそいつ。
「……那和……？」
「えぇ。紫藤先輩ですよ」
冴はいつものように盲導犬を連れていないためか、そのための代わりに白い杖を右手に握っており、
「ほら。紫藤先輩ですよ」とか言いながら那和だか流香だか寝ていて判断のつかない那和の顎を下からその杖で押し上げてこちらに顔を見せてきた。
何だか白目を剥いてこちらを見つめる那和か流香はとてつもなく不気味だった。
って、そんなことよりも
「何ともないのかい？」
「えーと、それは私がですか？それとも紫藤先輩がですか？」
「どっちもだよ」
「どっちもですか」
よいしょ、と力を込めて那和を背負い直す冴は半ば不満そうに頬を膨らませていた。

どうやら本当に何ともないようで僕は静かに胸を撫で下ろした。
「まぁ、あえて言うなら、」
その言葉を聞くまでは、
「斬原　流香……と名乗る人に襲われたくらいですね」
そして、その言葉を、名を、『斬原　流香』という『殺人鬼』の名を、聞いた瞬間に、僕は背中が嫌な汗をかくのを感じ、頭の中真っ白になるのを感じた。

◆

「……んぁ」
背中からもぞもぞと動く気配がする。
それから大きなあくびを一つ。どうやら、今まで寝ていたこいつはやっと起きてくれたらしい。
「起きた？」
声を掛けると、返事は無いものの身をよじっている感覚が背中越しに伝わってくすぐったい感じがした。
彼女がわずか動く度にふわりと彼女の香りが僕を包む気がした。
「……ん」
未だ眠そうな目を一度だけ擦り、彼女はまた体を僕の背中へと預けて、再び眠ってしまったらしい。
それは昔からよくあることだった。
那和と流香の、幼馴染みと殺人鬼の、表裏一体の関係。
それはふとした偶然で知ってしまった彼女の秘密。
今さら、冴に言われても、彼女への危機感などはとうの昔に薄れて消えた。

今さら、学校の幽霊に言われた僕の彼女への危険性なんてとうの昔に抑えこんだ。抑えたつもりだ。

彼女とともにいるために、彼女が彼女となったその時から、僕は僕を抑えて生きてきた、はずだ。少なくとも、僕だけは間違なく僕は信じている。

「……馬鹿らしいや」

どうせ色々と考えても自分に対する悲観にも皮肉にもなりはしないとわかっていて、何かしらあればすぐ繰り返す自問自答にはもう飽きた。

どうせ誰が何と言おうとも変わりなどしないくせに、なんて女々し……

「……っぐしっ！」

……妙に、後頭部が冷たい……。

「……何が馬鹿らしいのよ？」

いや、そんな僕の独り言より先ほどのくしゃみで何かしんみりした気分が一気に払拭されたこととか、僕の頭が妙に湿り気を帯びていることとか、実は起きてただろうな、とかとにかく色々と言いたいことがあるんだけどどうだろう？

とにかく、僕はあくまで手が痺れていたということで、彼女を支えていた腕を降ろす。すると完全に僕の背に体重を預けていた彼女は重力に引かれるままに地へと腰から落ちる。

そう、それはニュートンが見た林檎の落下の如く。

「ぎにゃあっ……！？」

奇妙な悲鳴を上げ、腰をうったのか、腰のあたりを擦りながらゆっくりと彼女は立ち上がった。

「……痛い」

「……そう」

……どうやら、今は、那和の方らしい。

流香ならこんなことで涙目で僕を睨んだりしないし、彼女なら迷わず僕をぶん殴るだろう。

「……落とさなくてもいいのに」
「……ん？そうだね」
僕は那和の文句を適当に受け流しながら、また歩を進める。
那和はまだ不満そうに唇を尖らせながら僕の後について来る。
それは昔から変わらない彼女との幼馴染みとしての関係。それは今まで変わりすぎて変わることのない変化。
昔からの彼女との平穏は、ある時あっけなく崩れ去り、今は少し、否、思いっきり変わった日常に身を置いている。
「じゃぁ、また明日」
もう、踏み込んでしまったことへの後悔も、帰れない二人だけの日常にも未練はない。
「うん。また明日ね」
彼女がいるだけで、否、彼女達がいるだけで、十分だから、か。
まぁ、とにかく、今日はここまでだろう。
さすがに、二日続けて出て来た流香も、二日続けて厄介事に巻き込まれている僕も、たぶん今日はよく眠れるだろうさ。

Fin.

１１，人格傷害　７／３（夜）（後書き）

ども、婀羅洙です。

何かもう、かなり間が開いてて忘れていた方も初めての方もとにかく御久し振りですね。

今回のお話『人格傷害』は無駄に内容がガラガラの骨組。

これから物語がどう展開していくかは、朋夜、冴、流香しだい。

さて、ここで浮き彫りのまま放置された問題が二つ。

一つは、流香と冴の最初の出会い。

一つは、流香と朋夜の過去。

どちらもそのうち書くので飽きないでそれまで見守って下さいな。

では、また次回『非常日常』でお会いしましょう。

１２，非常日常　７／４（朝）（前書き）

いや、何かもうほぼ一ヶ月ぶりの更新ですね……。

12，非常日常　7／4（朝）

「朋夜ーっ」
それは授業終了を伝えるために響くチャイムを無視して上がる声。
「テストどうだった〜？……と、それよりも先ずは――」
机に身を伏せ眠る一人の少年に、一人の少女は無邪気な笑顔とともに、少年が寝ていると知っていながら、否、知っているからこそ彼女は容赦なく、
「起きなさーーーーーーーーーーーーーーーいっ！！」
少年の耳元で、何処から取り出したのか、メガホン片手に、容赦なく頭蓋を突き抜ける爆音を叩きつけ、
「お・き・ろーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」
その声は校内中に響き渡り、今日もダークネスビューティーこと黒姫の健在であることを伝えたのだった。

◆

「……頭がガンガンする……」
「朋夜は寝過ぎだよ」
「清人、四限って何だっけ？」
「たしか……家庭科、次は調理実習じゃの」
「そうそう私の絶対的な芸術性を秘めた手料理を披露する絶好の機会よね」

「あー……調理実習か…」
「昼休みに購買部に行く手間と朝の弁当を作る手間とが省けたけぇ。わしは助かるのぉ」
「あぁ、そうか実習で昼食を作るってのも悪くないね」
「そうね！だから私が……！」
「それなら久々に清人の料理を堪能できるね」
「あまり期待せんほうがええよ」
「……だから私が……！」
「うーん、僕は久々にオムライス食べたいな。最近麺類ばっかりだったし」
「朋夜の場合は麺類というより素麺ばかりの間違いじゃろ？」
「いい加減に無視すんなー！！」
僕と清人がお昼に向けた話を弾ませていると、唐突に那和は人目も気にせず叫んだ。
いや、人目を気にしないのはいつものことだが……。
「私が！作ってあげるってばっ！」
ドンっと形の良い胸を張る那和。いや、何で……？
「ねぇ」
「ん？」
「そんなに自信があるのも気になるけど、那和って料理できたっけ？」
僕が知る限り、流香は出来た気がするけど（包丁捌きが飛び抜けて一流だった）、那和が料理しているところは十年来の付き合いがありながら見たことがない。
「そんなの当たり前じゃない！」
再び胸を張る那和。いや、まぁ、そんなに自信があるなら問題は――
「初めてでも教科書、見本、手本、道具に、参考書、そして才能があれば人間何でも出来るわよ！！」

――問題ある。

「どうしたの？ウニにマヨネーズをかけたものを見たような顔して？」

それってどんな顔だよ……。

「……もしかして、一人で料理したことは……？」

「無い」

「手伝ってもらってなら……」

「無い」

「じゃ、手伝ったこととか……」

「それも無い。でも大丈夫っ！何とかなるわよ！！」

さっきの、そして今も、いったいその自信はどこから来るのだろうか……？

清人なんて、さっきから必死に顔を逸して笑いを押し殺してるし……。

「……那和、料理ってのは……」

「ゴリラにも出来るみたいだからきっと私にも出来る！」

……聞いちゃいないか……。

「まぁ、とにかく楽しみにしながら、首をタワシで洗ってきちんと手を洗って、うがいして待ってなさい！」

そんな教育テレビで幼児向けによく聞くフレーズに似たセリフを一息に吐き出すように言って、那和は調理実習室へと走り去って言った。

「……毎回毎回、アクティブなのはいいんじゃが、あの手の自信はどこから来るんじゃろうか……？」

「……さぁ？　まぁ、間違なく今回も何かやってくれるんだろうね……」

僕と清人はそれを見送りながら、ため息をつくしかなかった。

「……ま。それでも最近はマシになった方じゃよ」

そうだね、と僕は頷いた。

僕らが入学した当初の頃に比べればたしかに那和は大人しくなった方だ。あの頃の那和は……うん、思い出すだけでも酷い……。
「たしかに、最近は暴力沙汰も起こさんし、本当に大人しくなったね」
「そうじゃな。おかげで大分巻き込まれることも少なくなったけぇ、大したもんじゃよ」
本当に、たぶん他人から見ても那和はだいぶ大人しくなったように見えるだろう。まぁ、それでも未だに一部から恐れ、恨まれていることに変わりはないんだが……。
その辺の大半を占める数を黙らせたのはこの優しい友人だった。
「本当に、清人には感謝してるよ」
なにを今さら、と清人は笑いながら調理実習室へと入っていった。
だから、たぶん僕が言った言葉の後半は聞いていないだろう。
「――僕だけじゃなくて、たぶん那和も」
と、僕が言ったことを。

１２，非常日常　７／４（朝）（後書き）

ども、毎度お馴染みの婀羅洙です。

いやー何かもうお久し振りです。だいたい一ヶ月ぶりということで、覚えて下さってる方がいらっしゃったらぜひメッセージなどを……

（以下略

さて、と。

久々に書いた『殺人鬼とペーパーナイフ』ですが、今回はたぶん、ほのぼのスクールライフという感じにいきたいと思います。

え？タイトルからしてもうほのぼの感が無いって？

何をおっしゃってる、そんなわけ――

――ありますね……。

まぁ、いいや。ほのぼのって言ってもこのキャラ達でのほのぼのは若干、本当に激しそうですから（笑）

まぁ、とにかくそんなわけで（どんな？）次回もお楽しみに。

13，非常日常　7／4（昼）

「………おかしい」

思いの他真剣なその声に、僕はため息しか出なかった。

「材料はこれに書かれている通り、調理手順にも問題はないわよね」

目の前のそれに向う那和の目は真剣そのもので、たかが調理実習でどうしてそこまで真剣になれるのか問いたかったが、僕がそれを訊くことは間違ってもないだろう。

「なんで、オムライスを作ったはずなのに、フライパンの上には炭が置かれているのかしら……？」

誰かがすり替えたのかしら、と呟く那和の顔から、僕は那和が自分の失敗を認めるのを拒否しているのではなく本気でそう思っていることを悟って、またため息がこぼれた。

しかし、いったいどう調理したらオムライスになる予定だったチキンライスと卵が炭になるんだろう……？

普通に調理する分には、ましてや調理実習として家庭科教師の監視下のもと、設備も材料も資料も一通りそろっているというのにどうして炭が……？

……って、おい、フライパンから炭が取れないからって熱されて熱くなったフライパンを振り回さな…—

「熱ぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「あ。ゴメン」

那和の振り回していたフライパンがたまたまそこを通りかかった宮田君の顔面を捕らえた。　………ってゆーか、熱されたフライパンを人にぶつけといて『ゴメン』の一言ですますなよ……。

「……何だか紫藤の方は大変そうじゃの……」
……うん。向こうもたしかに大変そうだけどさ、清人、君も何か凄いよね……？
裏ではゴリラ評されるマッチョがエプロンつけてチキンライスを炒める姿が妙に眩しいよ。
「ん？　どうしたんじゃ？」
今さらだが、料理をしながら爽やかな笑顔を見せる清人に、周りの視線が集中していた。
おそらくは皆が皆、清人がフライパンを巧みに振う姿など予想だにしていなかったからだろう。
しかし、まぁ、いつ見ても素晴らしいフライパン捌きを見ているだけの僕は本当に手伝わなくていいのだろうか……。いや、ダメだろ。やってもらってばかりじゃダメだろう。
「朋夜、皿を何枚か出してくれん？」
「わかった。えーと、僕と清人と那和と、提出用に小さいの一枚ってとこ？」
……うん、ゴメンね、清人。料理における『調理』という工程で、僕何かが君を手伝えるわけがなかったよ……。
僕が適度に並べた皿に、清人は先ほどまで炒めていたチキンライスを一皿一皿に丁寧に盛っていき、その上にプレーンオムレツを乗せていった。乗せられたプレーンオムレツに清人がナイフで一筋の切り込みを入れると、その切り込みからオムレツは割れて、とろりと溶けた卵がチキンライスを包み赤いチキンライスを黄金色に染め上げる。
そして、あらかじめ冷水に潜らせたレタスを手で適当に千切り、添える。
最後にプチトマトを添えて全体の彩りを整え、
「スープもつけて……よし、完成じゃ」
出来上がった料理に、もはや観客とかした級友達のほとんどが歓声を上げ、その歓声は授業終了を伝えるチャイムを完全に飲み込ん

だ。
……那和だけはまだフライパンを振り回していたが……。

◆

「……納得いかない、って顔だよね」
僕はそれを見ながら、とりあえず見たまま思ったままの感想を述べてみた。
「……だからって食べ物に無言で向かうのもどうなんじゃろうか……」
清人もまた、箸（スプーン）を進めながら同じく見たまま思ったままの感想をぼそっと漏らした。
現在、時間により昼休みに入り、僕たちのクラスのほとんどの人々は調理実習室へと止どまっていた。
まだ調理をしているものもまだ見られるが、クラスの人々の大半は先の調理実習を終えており、それぞれのグループ（基本的に三人組）が作り上げた料理を思い思いの感想とともにちょうど空腹時のお腹へと納めていく、……一ヶ所のテーブルの剣呑な問題児にコソコソと視線を走らせながら……。
……こらこら、周りをむやみに睨んだりなんかしたらダメでしょ。明らかに見られてるからってその視線に意外に鋭い眼光で応えていると友達減るよ。僕だって恐いんだから。
「ごちそうさまっ」
ふん、と鼻息を荒げて立ち上がる那和。しかしなぜか、
「よしっ」
「那和……？」

なぜか見て分かるくらいに気合いを入れて、那和愛用の黒い革のジャケットを放った。適度に流した髪を後ろに一纏めに括り、エプロンを着用。包丁を握り締め、
「涎垂らして待ってなさいっ！」
包丁を僕に突き付けていきなりそう宣言した。どうでもいいけど包丁は振り回さないでよ。危ないから。
「――って、材料が無いじゃないのよ！？」
知らないよ。ってゆーか、作るつもりだったの？　あれだけ失敗しといて？
それから包丁は振り回さないで。本当に危ないから。
「卵に米に鳥肉、ホールトマトに生姜とニンニク、ウナギとスッポンが無い！？」
ちょっと待って。那和さん、貴女は本当に何を作る気なの？　前半のものはさっきまで食べてたオムライスの材料かとも思えるけど後半の品々は絶対に違う。というか明らかにおかしいよね。
ってゆーか、さっきの言動からして、それらを使った料理が出来上がっちゃったりなんかしたら僕が食べなきゃいけないわけ？　ねぇ？
周りに助けを求めようと視線を走らせても、皆がそろいもそろって努めて視線を逸らしてくれる。
清人なんてもう苦笑するしかない、って顔で遠い目をして僕を哀れんでいるようにも見える。そんな顔してると僕にはもう助かる見込みはないみたいじゃないか。
「お待たせっ！」
那和、別に誰も待ってないから。それからその材料をどこから持って来たのか詳しい説明を頼みたいんだけど。あとさっき口走ってた材料以外にも何か増えてるよね？
その手に持ってる蛇のホルマリン漬けとか絶対おかしいよね？
まさかとか思うけど、それは料理には入れないよね？
「え？　入れるわよ。だって美味しそうじゃない」

どう見ても美味しそうには見えない。
どう見ても嫌がらせにしか見えない。
あー、もう、昨日休んだばかりだっていうのに今日は午後から早退だろ――――

「――わんっ」

あれ？　今なんか聞き覚えのある鳴き声ととてつもなく嫌な予感が重なったような……

――ガブリっ。

「――っ！？」

ガジ――――と、何かに左脚の脛を噛まれたわけで……。

「――っっっ！？」

僕は脛に走る痛みに声の無い悲鳴を上げ、

「兄さん――じゃなかった……九条　朋夜はいますか……？」

「……冴！　良かった、ポチが逃げてるよ！？　ってゆーか僕に噛み付いてるよ！！」

その飼い主、冴を見つけて、僕は安堵していた。

「あ。兄さん、帰りに家に寄って下さいね」

「……え？」

「お父さんが、会いたいそうです」

不思議と、脛を噛まれた脚の痛みが、不意に頭を走った戸惑いに、あっけなく消された気がした。

「橙史（とうじ）さん、が……？」

そして軽く首を縦に振るだけで、冴は僕が聞き返したそれを肯定した。

……正直、嫌な予感ほど当たるとはこのことか、と考えてしまう。

ちなみに、那和はフライパンは大炎上で、清人は消火器を持ってなんとか調理実習室の惨状を小火で止どめていたのは別のお話。

１４，非常日常　７／４（夕）（前書き）

久々に更新しました。
実に二ヶ月ぶりくらい（汗）

１４，非常日常　７／４（夕）

「本当に、それでいいのかい？」
そう尋ねられて、僕はたしかにそれに頷いた。
後悔は、なかった。
悲しくも、なかった。
嬉しくも、なかった。
ただ、空しかった。
そうなることを、そうすることを選ぶしかなかったことが――。
「寂しくなるね」
「……うん」
少しだけ、それに頷くことをためらった。
頷いたら、気がついてしまう気がしたから。
「どうしても、なのかい……？」
またそう問われ、僕は少しだけ考えて、
「どうしても、です」
また、こう応えた。
本当にそれでよかったのか、今問うても僕はあの時と同じく、少しだけ考えて、
「これで、いいんです」
僕はきっと、こう応えるだろう。
「――きっと、これで、いいんですよ」
僕は、僕を女手一つで養ってくれた母さんが――
僕は、僕を本当の兄の様に慕ってくれる義妹が――
僕は、僕を本当の息子の様に見てくれる貴方が――
「……あそこには、僕は居られないですから」
――僕は、貴方達が大好きですから――。

「今日から、僕はここに住みますね」

――だから、僕は、貴方達を××たくないから――。

◆

「朋夜、まだ寝てる？」

「ん……」

まだぼうっとする頭を押さえながら、その声の主の問いには手を振るだけで応える。

似合いもしない、昔の夢を見ていたせいか、何故かそれが夢だとわかっていても起きられない自分は女々しいな、とか。そんな余計なことばかりが頭を過ぎる。

「疲れとるんか？　午後の授業が始まってから今までずっと寝とるなんて、珍しいのう」

清人のその言葉に、時計の針を見ればもう三時半を回っていた。どうやら、僕は放課後までずっと寝ていたらしい。それも誰にも起こされずに。

って、そんなわけないでしょうが。さすがに授業を二時間ぶっ続けで寝てれば誰か起こそうとするだろうし、先生だってそんなのを見逃すはずがない。誰かが起こそうとすればさすがに僕だって起きるよ。たぶんだけど。

「いや、起こそうとは思ったんじゃが……」

「朋夜が気持ち良さそうに寝てたから全部未然に完璧完全に私が防

いだわ！　朋夜の安眠のために！　クラスメイトとか教師とか！」
偉くない！　褒めて褒めて！　――と、胸を張る那和に頭が痛くなる。　どうしてこうも余計なことでけっこうな迷惑をかけてくれるのだろうか。おかげで今日の僕のノートは白紙だし、今日返されるはずだったテストはいったいどこへ行ったのか。果たしてクラス中に晒されたのか、それともまだその教科ごとの先生が持っているのだろうか。どちらにせよ、あまり良い気はしないけど。
まぁ、いいか。どうせ月並み人並みのつまらない点数だろうし。気にしてもしょうがないよね。気にしなければきっと何とかなるさ。きっと。たぶん。おそらく。ｍａｙｂｅ？
「ん。私の活躍がわかったのなら帰りにチョコレートパフェを奢ってね！　あとストロベリーのアイスも！」
那和、その活躍が決して役に立ったわけではないんだけど。むしろその逆なんだよ。それだというのに君は僕に奢れと？
「嫌」
「紫藤、横暴が過ぎるんじゃよ……」
那和は唖然としていた。いや、何で？　当たり前でしょ。むしろ僕が那和に奢ってもらいたいくらいだよ。
「嫌よ！　私が朋夜以外の人に奢るなんて！」
思ったことをそのまま文句に変えて吐き出すとこんな無茶苦茶な理由を返された。
って、いいんじゃないの？　奢ってもらいたいのは僕なんだし。
「朋夜に奢るとその場にいる他の人に奢らないわけにはいかないじゃない！　ゴリラとか妹とかに！」
意外と良心的な理由なのね。横暴だけど。あと清人のことをゴリラ言うな。清人が傷付くじゃないか。実は繊細なんだよ、清人は。那和と違って。
「いや。いやいやいやいやいやいやいやいやいや……私だって繊細なのよ？　だって女の子だもん」
知らないよ。

「そんなことより、帰ろうよ。もう遅いし。僕はチョコレートパフェやアイスなんかより夕飯の材料買いたいし」
さすがにもう素麺だけは嫌だ。特にケチャップは。ついでにコーラも。
そんなことを言ったら、清人が今日は家で食べて行かないかなんて言ってくれた。いや、マジで？　本当に嬉しいんだけど。最近食費がヤバくて貰いものの素麺で頑張ってたんだけどさすがにそろそろダメかな、って思ってたんだよね。
「朋夜、帰りにチョコレートパフェとアイスとプリンとケーキとクレープ奢ってあげるわね……」
あれ？　何でだろう。まさか那和がこんなことを言い出すなんて。いや、嬉しいんだけどさ。
あと、それより何より気になるのは清人と那和が何でだか僕を可哀相な子を見るような目で見てる気がしてならないんだよね。
那和なんて思いっきり目を潤ませてるし。清人はなんか僕の肩をぽんぽんと叩きながら『誰でも出来る節約料理』って料理本の存在を教えてくれるし。いや、ありがたいけど。なんか違和感があるんだよね。なんとなく。
「じゃ。なおさら早く帰ろうよ。あんまり遅いと清人にも――」
「にーいーさーんー……」
……あ。忘れてたことが一つあったね。そういえば。
声のした方に振り返ると、両目を包帯で隠しているくせにその目はメラメラと憤怒に燃えているんだろうな、なんて思われる形の良い柳眉をつり上げて教室の入口に仁王立ちしている少女。僕の愛しい義妹、冴がいた。それも無茶苦茶ご立腹なご様子で。あのポチが隣りで震えてるんだけど。
「やぁ、冴。今日も可愛いね」
「今日のお昼にお会いしたばかりですが……？」
そうだね。あと僕に対して何とか拳法とかの使い手とかでも逃げ出しそうな凶悪な笑いを見せないで。お兄さん泣きそうになっちゃ

うからね。そんな妹の脅威に。
「兄さん」
「……はい」
「私、言いましたよね？　今日の三時から図書室で待ってます、って」
「……はい」
「今、その三時の３０分後ですね」
「……はい」
「私を待たせて、何していたのですか？」
「……寝てました」
「酷いですよね？」
「酷いですね……」
「何か言うことはありませんか？」
「ごめんなさい……」
「許しません」
あの、本当に笑ってる方が怖いよ？　口許がつり上がってるだけで、あと笑ってないよね。謝ったのに
「許しません」で斬っちゃうし、絶対に怒ってるよね。いや、わかってるけどさ。
「妹ってあんなに怖い子だったかしら？」
「お淑やかなお嬢様なイメージがあったんじゃがな」
二人とも今さら端からの傍観者ぶらないで！　助けて！　僕を！
蛇に睨まれた蛙どころじゃない僕を助けて！
「……いえ。やっぱりもういいです……」
なんと！　僕の必至の心の中限定の祈りが届いたのか、冴が諦めたような息をついてさっきまでの剣呑な空気を解いてくれるとは。
お兄さん嬉しいよ。本当に。寿命がかなり縮んだけど。
「このことは忘れませんけどね」
借り一つってやつです、なんて言いながら舌を出して笑っていた。
うん、冴さんや。可愛らしいのは僕としては全然構わないんだけど

さ。借り一つなんて粗暴な言葉はどこで覚えてくるのさ、このお嬢様っ子は。あと冴に対する借りなんて僕は返せる自信がないよ。特に金銭的な関係で。

「別に物なんかで返してもらうつもりはありませんよ。身体という名の労働力で返してもらう予定ですから」

それは僕が人並み以上に体力を使うことを嫌っていることを知ってる妹の発言かい。面倒臭いわ！

「では、許しません。父さんに頼んで兄さんへの仕送りを減らしちゃいますよ？」

「……ごめんなさい」

まさか、そうくるとは……。仕送りが減ったら僕が暮らしていけないじゃないか……。って、むしろそれが冴の目的か……！

「どうでもいいけど、帰るんじゃないの？」

「どうでもいくないよ。僕の生活費がかかったからね……」

何気にお嬢様な那和にはわからないだろうけどね。仕送りが減るってのはバイトすらしてない僕にはとってもつらいことなんだよ。食費に回せるお金とか減るから水道代や光熱費とか節約しないといけないし。面倒臭がりで働くのが嫌な僕にはとても辛いことなんだよ。

「それなら家で養ってあげようか？　たぶん兄さんも母さんも父さんも歓迎してくれるわよ？」

「是非お世話に――」

「ダメです！　そんなことは私が許しません！」

……いや、うん。わかってるよ。僕だってそんなヒモみたいな生活は嫌だよ。羨ましいけど。

だから、そんな冴も力強い否定をしながら那和を睨まないで。眼に巻かれた包帯のせいで馴れてないと睨んでるってこと自体がわかり辛いから。あと那和も睨み返さなくっていいから。怖いから。清人と僕がめっちゃくちゃ怯えてるから。特に僕が。

「ねぇ。清人」

「何じゃ？」
「帰ろっか」
「この二人はどうするんじゃよ？」
冴と那和の二人はお互いに無言で睨み合ったまま、動こうとしない。
「そもそも。貴女、兄さんの恋人さんとかでもないのになれなれしいんですよ」
「いいじゃない！　私と朋夜は将来を誓いあった仲なのっ！」
「――な！？　それなら私は兄さんと婚姻届けを出したんですよ！」
「……帰ろうよ。僕ここにいたくないよ……」
「……そうじゃな……」
目眩く飛び交う嘘の応酬をＢＧＭにした教室を、僕は清人と二人でこっそりとあとにした。
後から二人が追って来ると怖いので、僕と清人は教室を出てから走った。
どうでもいいけど、校庭から教室を見ると、二人はまだ何事かを言い合っているようだった。迷惑だから止めなよ。本当に。また僕に変な噂が立つから。
「……大変じゃな、お前さんは……」
……うん。今さら過ぎて涙も出ないくらいにね……。

１４，非常日常　７／４（夕）（後書き）

どうも。お久しぶりの婀羅洙です。
実に二ヶ月ぶりの更新でまだ私の存在を覚えている方がいましたら本当に嬉しいことです。お礼にラーメン奢っちゃいます。嘘だけど。

……はい。実は最近大会だとかテストだとかでこっちではまったく更新できませんでした……。
もし、続きを心待ちにして下さっていた方へは深くお詫び申上げます。

それから、アクセス１００００突破ありがとうございます。
まさかこの作品でいくとは思ってなかったのですが、この場を借りて深々御礼申上げます。

ではまた次回『家族会議』にて。

家族会議（前書き）

本当に……おひさしぶりです……

家族会議

「や。おかえり」
何かいた。
「ん？　どうしたのさ？　そんな面白い顔して」
僕はそんなに面白そうな顔をしていたのだろうか。いや、本当にそんなことはどうでもいいんだけどさ。僕の顔なんて毎朝毎朝顔を洗う時なんかにでも見てるし。それよりも。
「何で橙史さんがいるんですか？」
「ん？」
じゃねぇよ。どうしてこの人は何の前触れもなく人の家に勝手に上がり込んでお茶を啜ってるのだろうね。あと羊羹は戸棚の奥に隠していたはずなのに。食べてるし。普通に食べてるし。まるで自分のものだと言わん許りに食べてるし。つーか囓ってる。羊羹囓ってるよ、この人。
「んー……、と……食べる？」
「……いただきます」
ん。美味しい。当たり前だけど。
「ところで、冴ちゃんは？」
「さぁ」
「さぁ、ってことないでしょ？　冴ちゃんに君を連れて帰るように頼んだのにさ」
「じゃ、何でおとなしく家で待ってないんですか？」
「どうせ君なら冴ちゃんから逃げるかな、と。冴ちゃんのことだから君を連れてく前に先ず君の了承もらおうとすだろうからね。信用できないじゃん」
いや。自分の娘くらい信用しろよ。まぁ。ご察しの通りの結果になったけど。

「だからさ。来ちゃった」
てへっ。なんて舌を出して笑う橙史さん。正直、こんなことをやる二児の父なんて見たくなかった。あと無駄にその動作が似合ってるのが本当に嫌だ。一応、息子として。
そんな僕の冷たい視線を感じてか、橙史さんは咳払いを一つついて急に真面目そうな顔を作った。いや、遅いから。もうすでに遅いから。今さらそんな顔をしてももう父としての威厳なんて一切合切ぶっ壊れてますから。
「……そんな冷蔵庫の奥底で一ヶ月くらい放置されたままになってた牛乳みたいに冷たい目で見るなぁぁぁあ！」
わけがわからないですから。あとそれは冷たいというよりも臭いものですから。
なんか勝手に泣き出した橙史さんを無視してお茶を淹れることにした。うん。お茶が美味しい。羊羹によく合うし。「無視してお茶なんか啜ってないで！　お父さん寂しいから！　あと俺にもお茶一杯っ！」
「はいはい。お義父さん……」
義父、九条（くじょう）　橙史（とうし）はテーブルをバンバンと叩きながら湯飲みを差し出してきた。たまに、というか、よく思うんだけど。この人って本当に二児の父なんだろうか。威厳とか大黒柱っぽさなんて微塵もないし。父というよりも、良くて出来の悪い兄みたいな印象を受ける。悪くて弟。息子。
「――というか、まったくもって父親どころか、大人にも見えませんよね」
「えー」
「ほら。そんなところが」
「何だよー、いーじゃん。これくらいは。茶目っ気たっぷりの気さくなお父さんって感じでさ」
「おっさんの茶目っ気なんて披露されても、息子からしたら迷惑な

だけですよ？」
「ひどっ！？　納得できるけどひどっ！」
「いやいや、納得しないで下さいよ。貴方のことなんですから」
自分のことを言われて勝手に納得されても困るじゃないか。あと無駄にこの人うるさいし。
「まあ。でも、お父さんらしくないのは本当かもね」
カラカラと笑いながらも、ぽつりと漏らした独り言のように橙史さんは目を細めてそう言った。
「一人暮らしにはもう慣れた？」
そして、いきなりそんなことを尋ねてきた。
「ええ」
「学校は？」
「まあ。それなりに」
「部活は？　将棋部だったけ？」
「違いますよ。部活は……何部でしたっけね」
「なにそれ？」
「何なんでしょうね？」
実はあまり詳しく僕も知らないのです。所属しているだけなので。
「まあ。いいけどね。お金に困ってたりなんかはしない？」
「今月は少し厳しいかもしれませんね」
「そう。だったら後で口座に振り込んどくね」
「あ、ありがとうございます」
まさか、こんなところでそんな話になるとは思わなくて、僕は少し言葉に詰まってしまった。
「鏡子さんには内緒だよ。バレたら僕も朋夜君も叩かれちゃう」
「……そう、ですね……」
たぶん、もし母さんに橙史さんからお金をもらったことがバレたりなんかしたら、本当に冗談じゃなくて大変なことになりかねない……。
「まあ。バレたらバレたで。その時は『与えたお金だけで生活でき

ないなら帰って来なさい』とか言いながら、僕達が意識失うまでぶん殴るんでしょうね」
「鏡子さんは厳しいからね。それから何より君のことを心配してくれてるし」
あの、心配してくれてるわりには仕送りのお金についても厳しいし、週に何度かはたくさんのお叱りのお言葉がこれでもかと並べられたメールが来るのですが……。
「それは鏡子さんが早く君に帰ってきてほしいからだよ。ほら。あの人って何かそういうこと言うのって恥ずかしいことだって思ってる人だし。何よりそれが自分に似合わないって思い込んでるみたいだもん。不器用な鏡子さんなりのわがままとでも言うのかな？」
思ったままのことを、そのまま尋ねてみると、橙史さんはこう答えてくれた。何というか、不覚にもそうかもしれない、なんて思ってしまう。そんなよくわからない説得力を孕んだ言葉。
「まあ。何て言うのかな？　ツンデレ？　それともマイホームマザー？」
……あの、せっかく感心していたのに、台無しなのですが……。
「でも、まあ。帰ってきてほしい、ですか……。たしかに、僕のわがままで勝手に出てきてしまいましたしね……」
「うんうん。鏡子さんってばすっごく怒ってたもんね」
実際、あの時は本当に大変だった。なにせ、新居に荷物を運び込んだその日に母さんが殴り込みに来たのだから……。
「そしてこれからが本題なのです」
「はい？」
「家に帰ってくる気はない？」
ああ。訊きたかったのはそれか――。
「冴ちゃんや鏡子さんが君がいないと寂しいんだって。それに君が家にいないってだけで、鏡子さんってば口には出さないけど君に会いたくて会いたくてしょうがないって感じ。少し足をのばせば会えるとこにいるってのにさ」

「そう、ですか」
「僕も帰ってきてほしいし」
「……」
さらりとそう言われて、僕は気の効いた答えも言えず、黙りこくることしかできなかった。
口を開いたら、思わず
「帰りたい」と言ってしまいそうで、言ってしまったら、橙史さんに引っ張られて連れて帰ってしまって、そのまま――
「――あ。無理だ」

やっぱり帰れない。
あそこに僕は住めない。
あそこに僕はいられない。
あそこは僕のいるべき場所じゃないから。
特に理由なんてものは――今となってはどうでもいいのだけれども……。

「そっか……」
ただ、僕の口からこぼれた言葉に、橙史さんは、微苦笑交じりに頷いて、
「ま。帰ってきたくなったらいつでも帰ってきなよ。あそこは君の家なんだしさ」
と、言った。
だから、僕は、
「そうします」と言って、微苦笑で応えた。

「じゃ、またね。息子さん」
「はいはい。お義父さん」

そうして、二人だけの家族会議は幕を閉じたのだった。
この日は。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7950c/

殺人鬼とペーパーナイフ

2010年10月8日12時40分発行